

概要書 平田国学と気吹舎の書物―その出版構造と地方門人層の展開―

吉田 麻子

本論文の目的と背景

本論文は、平田篤胤（ひらたあつたね）（安永五（一七七六）～天保十四（一八四三））およびその門人組織である気吹舎（いぶきのや）の書物成立についての具体的な構造と、それをめぐる人々の様相と展開を解明することを目的としている。

これは従来、部分的に先行研究の中で扱われてはきたものの、著述の成立から出版・流布・受容といった書物をめぐる一連の流れや、その周辺に関わる人々の意識に及ぶような社会史的な方向では近年に至るまで、ほとんど取り上げられてこなかったテーマである⁽¹⁾。特に、幕末・維新期の気吹舎については、尊皇攘夷運動に関係する政治的な側面を指摘されることが多いが⁽²⁾、このような局面においても「書物」は無視することのできない重要な要素である。すなわち、平田篤胤自身は天保十四年（一八四三）に没しており、門人たちがいわゆる幕末の志士として政治運動に奔走するような時期には、気吹舎の支柱である篤胤の思想は「書物」として全国に流布しているからである。篤胤の著した著述のほとんどは、幕末から明治にかけて刊行され、膨大な販売数をほこる⁽³⁾。この時期の気吹舎書籍の刊行・流布についての説明は、人々が当時どんな思想を求めていたのかということ、そして気吹舎が明治初期には四千人近い門人を獲得するに至った理由を明らかにすることへとつながると考える。

*

このような筆者の問題意識の前提には、平田篤胤と気吹舎の動向を歴史的に決定づけるための史料の問題がある。

平田家に伝わる篤胤の日記や書簡類が初めて公開されたのは、渡辺金造『平田篤胤研究』においてである⁽⁴⁾。本書において四冊の『気吹舎日記』と、篤胤の晩年を中心とした書簡一四五点が活字化され、以後、平田篤胤研究に欠かすことのできない基礎的な史料となった。だが、気吹舎の動向を最も詳細に知ることが可能である『気吹舎日記』の全体像や、全国に広がる門人と気吹舎との間にやりとりされた書簡類、篤胤の草稿類などの全容は明らかではなく、実際のところ渡辺金造以降約六十年もの間、平田家の史料はほとんど世に出ることはなかったのである。

そのような状況の中での転機は、二〇〇一年十月から行われることとなった「平田篤胤関係資料」の悉皆調査であった。国立歴史民俗博物館の樋口雄彦と宮地正人が中心となり、一点目録の作成が開始された。筆者もその作業に当初から参加することとなった。目録作成は、二〇〇四年二月で一応の目途がつき、平田家の一万点の史料は国立歴史民俗博物館に移行され、ついに一般公開されるはこびとなったのである⁽⁵⁾。そして従来その存在は不明とされてきた天保期の『気吹舎日記』のみならず、幕末・維新期に至る日記や、地方門人からの大量の書簡の存在が明らかとなった。また、これまで刊記がないために説明が困

難であつた気吹舎蔵板本の、出版年がすべて判明した⁶⁾。さらに平田家の史料全容が明らかになったことにより、地方に蔵されている平田家から門人に宛てた書簡についても、相互に検討し理解することが可能になったのである⁷⁾。

本論文は、このような新出史料と、その調査をおこなう中で形成された問題意識をもとに執筆した論考をまとめたものである。

各編の概要

本論文は以下のような構成をとっている。

第一部 平田篤胤生前の気吹舎と書物

第一章 「平田篤胤の常陸・下総訪問」

第二章 「越後の平田国学―鐔胤の越後巡遊と『医宗仲景考』―」

第三章 「気吹舎の著述出版構造」

第四章 「気吹舎における出版と費用」

第五章 「『稻生物怪録』の諸本と平田篤胤『稻生物怪録』の成立」

第二部 幕末維新期の平田国学と出版

第一章 「国学者平田篤胤の著書とその広がり」

第二章 「平田篤胤『古今妖魅考』の出版事情」

第三章 「秋田の平田門人と書物・出版」

第四章 「幕末維新期の東信州と平田国学」

第三部 資料編

『気吹舎日記』解題

『気吹舎日記』翻刻

第一部は、篤胤の思想の媒体である書物成立と出版について基礎的な構造を明らかにするとともに、地方における書物頒布を伴う啓蒙活動と、その結果である地方門人成立の様相や、門人たちの学問的主体性について論じる。方法としては渡辺金造『平田篤胤研究』で紹介されていない新史料を加えることによって、新たな事実を提示するとともに、従来の説を補足し、また渡辺が言及したこととその後定説化された視点を改めるという方向性を目指す。

第一章では、文化十三年と文政二年に二度にわたっておこなわれた篤胤の常陸・下総旅行の目的について、二冊の旅日記『文化十三年かぐしま日記』『二度の鹿嶋立』を中心に論じた。篤胤がこの旅に求めたものは、従来の説にある「参詣」や「出版費用の募集」ではなく、むしろ鹿島神宮大官司鹿島則瓊^{かしまのりよし}をはじめとする、当地における知識人たちの交流や、人々への古道学講義による門人拡大活動、そしてみずからの学問的実地調査という、まさに平田学を構築し、書物として著し、人々へ伝えていくための足がかりそのものであったのだということを明らかにした。また、篤胤の足跡を分析する中で、この後重要な気吹舎の支持基盤となる下総の門人層確立の初期段階について論じた。

第二章では、篤胤生前から気吹舎の運営を一手に引き受けていた平田篤胤嗣子、平田鍊胤^{しん}の地方訪問のうち、文政十一年の越後路についてその旅日記『越後路手扣』^{えちごじてびかえ}を中心に、当時の気吹舎発展に向けての具体的行動や意義を検討した。本章においても、第一章と同様に、鍊胤の行動を史料から追う中で、当地における具体的な人々との交流やネットワークの解明に重点を置いている。篤胤や鍊胤が訪れることによつて萌芽をみる地方門人グループは、その後の気吹舎が発展する際に欠かすことのできない支持基盤となり、平田篤胤の思想が広がっていくための布石となるからである。特に、地方における思想伝播について考える際重要である書物頒布の側面として、鍊胤がこの時越後で販売した書物や、その対象者についても言及した。さらに後年（天保七年）、気吹舎の高弟生田万^{いくたよろず}（国秀）^{くにひで}が越後へ赴くことを踏まえ、文政十一年の鍊胤による当地巡遊との関連性と、「生田万の乱」後の越後門人についてもとりあげた。

第三章では、篤胤の思想が、どのような過程を経て客観性をおびた書物という形を与えられ流布してゆくのかという、気吹舎の出版構造について論じた。すなわち、気吹舎が出版をおこなう際には自ら職人を頼んで板本を製造し、書肆の介入はほとんど販売面に限っていたこと、この内部的な出版構造こそが、実は篤胤が筆禍を受けた際にも有効に機能したということを解明した。またそれに関連して、篤胤が晩年に蒙った「著述差し止め」と「国元秋田への退去」についての諸事情を「書物」という側面から『気吹舎日記』によって具体的に示すとともに、追放されてから篤胤が死去するまでの約二年間の気吹舎出版についても言及した。

第四章は、第三章の続編とも、第二部以降の序章ともいうべきものである。すなわち気吹舎出版についてのこれまでのこれまでの定説を改めながら、同時に気吹舎とそれを支える門人たちとの関係を考え直すことを目指している。

気吹舎出版物の成立・刊行事情を考える際、その序跋や校閲者として掲載されている人物が重要な意味をもっている。彼らはなんらかの形でその書物の成立・刊行に深く関与している可能性が高い。だが、渡辺金造以降、そのような刊本に掲載された門人たちはすなわち出版資金助成者であり、その姓名は出資の褒賞としてあげられているのだという説が通説となってきた。しかしこのような説は、あたかも篤胤が独善的に著作を執筆し、門人はそれを資金面でのみ支えるという師弟関係を印象づけるものである。門人が出版物を資金面でサポートしていたのは事実であるが、門人と気吹舎の関係はそうの一括りに論じられるものではないと考える。本章では、気吹舎出版構造の一端である経済事情についての側面を史料によつて明らかにすると同時に、門人たちは単なるパトロンの存在ではなく、学問的な主体性をもつ存在であるという点を主張した。

第五章では、第四章で論じた門人たちの平田学（篤胤の研究調査）への積極的な関わりという側面を、『稲生物怪録』^{いとうもののかげろく}という本の成立過程を検討する中で明らかにした。『稲生物怪録』は備後三次^{みよし}で実際に起きたとされる土着的な要素の強い怪異譚である。篤胤はこの実在性に注目し自らの幽冥界研究の対象とし、世間に流布していた写本を集めて独自の『稲生物怪録』を著そうとするのであるが、この際、地方における気吹舎門人はどのように有効性を発揮し、調査に協力し得たのかについて述べた。また、折口信夫以降、平田本『稲

『生物怪録』には篤胤の創作部分があるのではないかとされてきた。実在性に注目し幽冥界を立証するための材料であったはずの本作品に篤胤の創作が混入されていたとなると、気吹舎の学問方法にも異議をはさまざるをえない。各地に伝わる『稲生物怪録』の写本系統を分析し平田本の成立過程を検討する中で、気吹舎の学問方法や、地方門人との関係を考察した。

*

第二部は、「幕末維新期の平田国学と出版」と題し、主として篤胤没後の気吹舎について論じた。「地方門人」や「思想の媒体としての出版物」をキーワードとし、平田家や地方に伝わった史料を用いて考察してゆく方法は、基本的には第一部と変わらない。だが対象としている時代的な条件として、平田篤胤本人がすでに没しており、次第に社会が混沌とした様相を深めてゆくという点が、第一部とは決定的に異なっている。それに伴い筆者の問題意識も、「出版構造のあり方」や「気吹舎と門人達との交流」の解明といった視点から、「気吹舎出版物の拡大・流布」や、「地方門人層の主体性と展開」を探ることへと移行する。また現在残存している史料の量も、第一部で扱っている時代よりも格段と増加し、そのことがより社会的な文脈で気吹舎の書物や出版を位置づけることを可能にしているといえる。

第一章では、平田篤胤没後の幕末期において、気吹舎とその門人たちが気吹舎の著述をどのように売り弘めていったのかについて考察した。気吹舎の板本はほとんどが篤胤没後に刊行されており、その事実は、現代においても大量に残存する板本から一般的にも広く印象付けられていることである。しかし、篤胤が「著述差し止め」の刑を受け、その咎が晴れぬままに没した後、具体的にいつから新刊本が出版され、どこ場所において、誰によって、どんな人々を対象に広く売り弘められるようになったのか、ということについてはこれまで解明されていない。気吹舎から出版された百を超える著述類は、いうまでもなくその思想の伝達・拡大の手段として重要な役割を果たしたと考えられるが、このような幕末期における本のもつ社会的影響や意義を考えるための手がかりとして、気吹舎出版物拡大の様相について、篤胤生前と没後を比較しながら検討を加える。

第二章では、『古今妖魅考』の出版事情について論じる。篤胤は天保十一年末、幕府より著述差し止め及び国元秋田への帰還を命じられ、天保十四年閏九月、失意のうちに死去する。その後、江戸に残った嗣子鉄胤が気吹舎塾を運営し、全国的に拡大する門人の統括と、遺された膨大な篤胤の草稿を次々と出版することとなる。刻々と変化する歴史の動乱期において、篤胤の著作物は、流布させることと秘めることの間を漂いながら、その背後に門人達の意志と情熱を窺わせながら刊行されてゆく。よってそのような出版物の一冊一冊の刊行経緯を知ることが、社会史的観点からの読書を考えることにも繋がってくるのである。本章ではその第一歩として、篤胤没後、最初に出版された『古今妖魅考』をとりあげ、本書が、鈴木重胤^{すずき しげたね}の知的情熱に裏付けられた努力によって上木されてゆく様相を詳しく解明した。

第三章・第四章は、ともに篤胤の著述や出版物についての社会史的解明を目指す中で、地域に根ざし発展する地方門人たちの展開と、気吹舎との関係性を論じる。門人たちは地

域特有の環境の中で集团的結束をかため、独自に主体性をもちながら気吹舎との関係を深めていく。と同時に出版物も、そのような地域的な門人集団との関係性の中で成立し流布するのである。

第三章では、篤胤が晩年を過ごした秋田について取り上げた。藩校教育の主流が漢学であり和学がほとんど根付かないようなこの土地が、どのようにして後年約三百人の門人(生前没後を合わせた明治五年まで)を抱えるようになるのかについて、幕末期の平田門人たちの活動が一つの要因であるとの視点から論じた。秋田に於ける平田門人達による活動は、江戸からの書物購入、或いは出版助成といった行為をとおしておこなわれた積極的な平田学摂取であり、漢学的教養をベースとする門人達への啓蒙活動であった。主要門人達によるそのような自主的な活動こそが、大友直枝が和学振興を目指しつつも振るわなかった当地において、平田学を浸透させる大きな原動力となったのだといえる。

第四章では、書物の流れを中心として東信州における平田門人と気吹舎について論じた。佐久は赤報隊の中心的人物であり気吹舎門人でもある三浦秀波や水野丹波を含めて、多くの赤報隊隊員を育むと同時に、多数の気吹舎門人を輩出した土地でもあった。そのような地域において、篤胤の思想を伝える媒体としての書物は、掛川吉兵衛という支援者により啓蒙的な意識を伴って頒布された。そしてこのような書物販売行為は、商業的利益向上のみを目的とする一般書肆によるそれとは大きく意義を異にするものであったことなどを論じた。

*

第三部は「資料編」である。気吹舎を研究するための基礎的史料である『気吹舎日記』十五編を収める。

『気吹舎日記』は、渡辺金造『平田篤胤研究』において四冊(①文化十四年九月～文政七年十二月・②文政八年正月～文政十年十二月・③文政十一年正月～文政十二年十二月・④天保十二年四月～天保十三年八月)の翻刻が紹介されており、それ以後の研究史はこの日記をベースにおこなわれてきたといっても過言ではない。ただし、これらの日記には平田篤胤が秋田へ退去する以前に最も活躍した天保期の日記が欠けていた。また、渡辺も何度か論文中にふれている篤胤や鋳胤の旅日記も含まれていなかった。

ここに収めた『気吹舎日記』は、渡辺が一九四二年に初めて紹介してから実に六十年ぶりに公開された新史料ということになる。

第一部・第二部の論文においても『気吹舎日記』は全般にわたって所々で利用しているが、元来新出の『気吹舎日記』は全体で二十一編あり、その全貌は『国立歴史民俗博物館研究報告』第一二二集『平田国学の再検討(一)』・『国立歴史民俗博物館研究報告』第一二八集『平田国学の再検討(二)』(8)においてみることができるとなる。ただし本博士論文第三部に収めたのは、筆者がその中で翻刻を担当した十五編ということになる。すなわち、第一部第一章・第二章で使用した篤胤・鋳胤の旅日記をはじめ、気吹舎における様々な人々との交流を明らかにする天保元年から天保十二年までの日記、篤胤逝去後の鋳胤の行動を記録する天保十三年から弘化元年の日記、鋳胤の秋田旅行記である嘉永三年の日記である。

これらはいずれまでもなく、篤胤生前から没後まで気吹舎の活動を知ることのできる格好

の材料であり平田篤胤および気吹舎研究の根幹的な史料である。その全貌を世に出す一翼を担えたことを光榮に思う。

注

(1) 平田国学の出版物について社会史的に扱った近年の研究には、遠藤潤『平田国学と読書行為―相馬高玉家宛平田篤胤書簡にみる書籍の出版・流通』、『平田国学と近世社会』（二〇〇八年二月、ぺりかん社）や宮地正人「伊吹酒舎と四千の門弟たち」『別冊太陽 知のネットワークの先覚者 平田篤胤』（二〇〇四年五月、平凡社）がある。また、個々の出版物については中川和明の以下の論考がある。「平田篤胤の『出定笑語』の諸本」（『鈴屋学会会報』二〇、二〇〇四年一月）「平田篤胤の『俗神道大意』の形成と刊行」（『復刊東洋文化』九三、二〇〇四年九月）「平田篤胤の『古道大意』の形成と刊行」（『日本思想史学』第三十七号、二〇〇五年九月）「平田篤胤の『靈能真柱』の形成と刊行」（『鈴屋学会会報』二一、二〇〇五年一月）

(2) 伊東多三郎『草莽の国学』（一九四五年一月、羽田書店）・芳賀登『幕末国学の展開』（一九六三年一月、塙書房）・同『国学の人びと―その行動と思想―』（一九九〇年四月、評論社）・同『幕末国学の研究』（一九八〇年三月、教育出版センター）などをはじめとし、気吹舎を幕末の国学運動的な観点から論じた成果は数多い。

(3) 「平田塾刊本目録」（展示図録『明治維新と平田国学』所収、二〇〇四年九月、国立歴史民俗博物館）を参照。

(4) 渡辺金造『平田篤胤研究』（一九四二年十二月、六甲書房）

(5) 全体像は『平田篤胤関係資料目録』（国立歴史民俗博物館、二〇〇七年）で知ることができる。またその中で研究上基礎的な史料として『気吹舎日記』や平田延胤の書簡などが「平田国学の再検討（一）」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第二二二集、二〇〇五年三月）、「平田国学の再検討（二）」（同第二二八集、二〇〇六年三月）に翻刻紹介された。

(6) 「蔵板物覚」（国立歴史民俗博物館 平田篤胤関係資料 冊子一一）を元に「平田塾刊本目録」（前掲）が作成された。

(7) 地方の平田門人子孫のもとに残された史料について近年の研究には、宮地正人『夜明け前』の世界の歴史学的解明―幕末期中津川国学者史料の収集と公開―（平成十一年度、十四年度科学研究費補助金 基礎研究(C)(2)研究報告書）がある。また田崎哲郎『三河地方知識人史料』（二〇〇三年六月、岩田書院）や小田真裕「平田篤胤門人宮負定雄の教諭論」（『関東近世史研究』六一、二〇〇七年三月）などがある。

(8) 注(5)参照